E・ギュトゲマンスとその聖書言語学

——付・「"生成詩学" とは何か——新しい聖書解釈法に関するテーゼと省察」——（訳）

谷　口　　勇

1970年11月，西ドイツのボンにおいて，聖書の伝統的解釈学に現代言語学の成果を採り入れて，これまでの神学を一新させようとする革命的な運動が生じた。神学および言語学の学際誌 "Linguistica Biblica" を創刊し，モノグラフ叢書 *Forum Theologiae Linguisticae (FThL)* を創設したエアハルト・ギュトゲマンスがその推進者である。かれの紹介としては，Antonio Pinero Saenz, *Teología y lingüística. Introducción a la "Poética Generativa" de Güttgemanns,* in *Helmantica. Revista de Filología Clasica y Hebrea,* XXVII, 1976, 443-474 (Universidad Pontificia de Salamanca) が詳しい。今日では，同種の雑誌として，フランスに "Sémiotique et Bible. Bulletin d' Études et d' Échanges publié par le Centre pour l'Analyse du Discours Religieux" (Lyon)，合衆国に "Semeia. An Experimental Journal for Biblical Criticism" (Missoula) が存在する。

ギュトゲマンスの業績は今日では大小80点に及んでいるが，その主張はますます "生成詩学" に強く傾斜して来ている。

かれが送ってくれた私的な "精神史的素描" によると，当初はRudolf Bultmannの解釈学に没頭し，*Kerygma und Mythos* を熟読したことや，Hermann Gunkel の *Formgeschichte* に夢中になっていたことが分かる。

ところが，哲学の授業（Dr. Josef Schütt）を通して，こうした熱狂も相対化されて行く。認識論の講義で，Kant, Aristoteles, Leibniz 等に触れたり

（1953年），芸術論において Paul Klee や，Lessing の *Laokoon* を学んだりしたこと（1954年）は後の記号論に役立ったという。

いずれにしても，かれが学業を修了するころはまだブルトマン説の枠内に留まっていた。

この Bultmann 崇拝の夢からの“悪い目覚め”は，まずヘーゲル哲学によって成就される。ギュトゲマンスが言語学や記号論に目を開かれるまでには曲折があったのである。

この曲折の一面としては，ユダヤ教に関わりを持つ“ユダイスト”と，グノーシスに関わりを持つ“ヘレニスト”との間の宗教史的二者択一があった。Bultmann にはユダヤ教の源泉の知識が少ないことを悟ったギュトゲマンスは，初めて，ユダヤ教の源泉をヘブライ語とアラマイア語の原文で読む。Bonn にユダヤ人 Charles Horowitz がいたことはかれに幸いした。Philipp Vielhauer の命により，神学にあって言語学を営むことは断念せざるを得なかった(no. 17)。

さらに，もう一つの曲折としては，no. 2 の問題を解決することであった。ギュトゲマンスはそれをErnst Fuchs および新解釈学の裡に見出す。十字架の告知の記号的具体性。当時のかれは，Louis Hjelmslev もロシア・フォルマリストも知らぬままに，形相と内容の弁証法を見ていたことになる。

以上はギュトゲマンスが言語学を知る以前の段階である（“Güttgemanns I”と呼ぶ人もいるらしい)。ところが，かれは偶然 Harald Weinrich の *Tempus* を入手するに及んで，E. Fuchs の解釈は狭窄化だと認めざるを得なくなる。かくて，上述のような曲折を経てのことではあるが，ブルトマン説，フックス説，様式史，宗教史等の瓦壊が生じたのである。こうしてギュトゲマンスは言語学を知った段階にさしかかる（“Güttgemanns II”と称される)。ただし，かれ自身の言をもってすれば，無意識の過程ながら，徐々に言語学者や記号論学者になっていったのであり，“Güttgemanns I”と“Güttgemanns II”とを区別する必要性を認めていない。思考の継続性をかれは強調している。

その良い一例として，かれはギムナジウム時代に読んだプラトンの『クラテ

ュロス』のことを挙げている。1960年，Wolfhart Panneberg という過激なヘーゲル主義者に出会い，その“思弁的歴史主義”説に対して“出来事の二重化”の問題を追及したが，正答を得られなかった。この時ギュトゲマンスは再度『クラテュロス』を読んで，プラトンの問題もまさしく“記号を通しての存在の二重化”であったことに突如気付いたのである（1962年ごろ）。これはかれにとっていわばデカルト的な体験だったようで，神学に対して“Hic Rhodus, hic salta!”と言えるものは記号論だということをかれは初めて本能的に悟ったのだった。もちろん，それを明確に定式化するまでには幾多の曲折が必要だったが，かれの方向性はここに定まったわけである。

その第一段階としては，Bonn における Karl Barth 神学の克服があり，これに伴って，Bultmann も次第に遠ざけられた。

第二段階としては，Noam Chomsky や，当時 Bonn で支配的だったフンボルト的言語研究に接した結果，ギュトゲマンスは自らの解釈学的立場が支持し難いことに気付く。

上述のように，1970年11月15日に，ギュトゲマンスは Walter Magass と一緒に，“Linguistica Biblica”を創設したが，ここにおいて Chomsky が完全に開花することになった。同じころ，Peter Hartmann のようなテクスト言語学者によって，ギュトゲマンスが見出された結果，かれの“新約聖書の生成詩学”研究プロジェクト（4年間）がドイツ研究団体に採用され（総額18万マルク支給），Reinhard Breymayer や Pham hũ'u Lai たちと共同研究に携わった。これが契機となって同じ問題に関心を有する殆んど全世界の国々と接触を持つことになり，ギュトゲマンスの言によれば，“偶然に”ドイツの“言語学的”神学の創始者と見做されることになった。当初は神学への“内在的”批判であったものが，徐々に急進的批判へと移行するのである。

やがて，ギュトゲマンスは P. Hartmann 一派のテクスト言語学者たちから，“実証主義への信仰告白”を求められていることに気付く。これまで親炙してきた Aristoteles, Platon, Hegel, Leibniz 等をすべて放棄することを迫られた

も同然であるから，ギュトゲマンスには到底そんなことはできなかった。すでに1970年に，かれは先験的言語学（transzendentale Linguistik)を開陳しており，Chomsky に原則的には結びついていても，これを越えてヘーゲル主義的方向で解釈していた。そこで今やかれは Louis Hjelmslev を援用することになる。Chomsky 流の生成変換説を次の二点で **Chomsky を越えて**解釈するのである——①“歴史”との関連の中での“テクスト”と“意味”が主要テーマとなるように，文の限界を乗り越える，②統語論的変換だけが存在するという説を否定する。つまり，統語論的変換のほかに，意味論的・実用論的変換の存在を認めざるを得なくなる。また，実物の翻訳（Sachübersetzung）という，Bultmann にとっては実用論的でもあった問題が存在した。そこでギュトゲマンスの今日的定式によれば（付録の「“生成詩学”とは何か」参照)，“所与の”（gegebenen）テクストから，“生み出されるべき”（aufgegebenen）テクストへ——伝統的言い方では，テクストから説教へ——の道程はいかなるものか，ということが焦眉の問題なのである。言明上の断絶にも拘らず，“意味”の継続性を基本公理としなければならない，——Panneberg の言う自ら担う普遍的な“意味の歴史”を正しいものと認めるのでなければ。

ギュトゲマンスは Chomsky 流に行動主義を回避し，Hjelmslev を選んだのであったが，また，“精神”としての“意味”も選んだ点では，Neo—Humboldtianismusの伝統を受け入れたことになる。

『新約聖書』の言語上の問題点を解決するには，言語学上の機能主義が有力な手掛かりとなる。ギュトゲマンスは Karl Bühler や Friedrich Kainz, Roman Jakobson も援用している。しかし，かれ自身は，新しい“学派”が誕生するや，すぐそれに飛びつくようなことはしないように決心していた，と述べている。そのため，かれは独立を保ち，また，余りに狭い言語学に対しては，Schleiermacher の意味での神学的解釈学も，言語学に，未解決の問題提起をするに違いないことを示そうと試みたのだった。要は言語学に新部隊を送り込むことではなくて，学際的な問題の討議を切り開くことがかれの意図なのである。

構造主義に対する態度では，かれはそれを「先験的主体抜きの，だが“テクスト”という名の先験的客体を有する，カント主義」と定式化している。“静態的”な意味での“構造主義者”と呼ばれることを，かれは嫌っており，むしろ，生成変換論者たらんと欲している。“生成詩学”という標語には，自ら言語の“主体”とならずに，“テクスト”の中に“意味”を生み出す人間の能力やその創造力への問いを潜ませているのだと，かれは述べている。

ギュトゲマンスの唱道する“生成詩学”は実に革新的であり，それがもたらす結果は数知れないほどである。一例を挙げてみよう。

“生成詩学”の立場からすると，テクストの意味は，発信者（作者）だけが生み出したものとしても，また，発信者と記号（対象を表わすもの）との関係としても，理解されることはできず，これら三成分が同時的に意義に参与している三幅対的機能として理解されうるのである。また，言語能力（competence）の生成過程は絶えず生きた，動態的なものである。だから，意味の伸展過程には終りがないとすれば，あるテクストの意味を“歴史的に”永久に固定させようとすること（歴史主義のイデオロギー）は，間違いということになる。そんなことをすれば，意味の自由な生産性の過程が死んでしまう。ギュトゲマンスはこの考え方がキリスト教解釈の広汎な分野を切り開くし，したがって世界教会運動（ecumenism）を助長するものと考えている。表われ方（performance）――キリスト教史を通してテクストの中に宗教的内容を作り上げる種々のやり方――では種々異なっていても，それぞれの告白は同一のキリスト教的“能力”（competence）に属するものと見做されうるからである。ここでは独断論は排され，寛容的態度がそれに取って代わるであろう。

同じく，幾世紀を通して教会が生み出したもろもろのテクストも，同一のcompetence から生まれたのかどうかが分かるまで，験べられねばならない。つまり，『新約聖書』テクストの文法基盤（competence）も，今日のキリスト教宣教のそれも，同一のテクスト能力から生まれているに違いないというのである。

もちろん“生成詩学”は誕生して間がない学問だし，その主張や諸成果は今

後の出版物の中で実現され，詳述されることであろう。

批判もまた数多く行なわれている。Coimbra の V. M. de Aguiar e Silva は，Chomsky の“言語能力”概念を“文学能力”等に安易に適用することに疑問を投げかけている（拙訳『言語能力と文学能力――生成詩学の可能性について――』，渓水社1981，参照）。ギュトゲマンスの“言語学的神学”と Eugene A. Nida のそれとを比較して，H. Balz は，ギュトゲマンスの体系は難点に満ちていると述べている。たとえば，内容もしくは“意味作用”〔＝意義〕は文のように構造化されてはいない；統語規則をテクストの領域に転用することは容認されない；テクスト解釈に必要な学問たる文化人類学を忘却している，等。文法は『新約聖書』神学の基礎学ではない。相互にアナロジーはあっても，同一性はない。相互の関係は包含的ではない，――信仰（神学の対象）が文法的ではなくて，実存的要素を持っていることは明らかであり，“生成詩学”の体系がこれに注目することはできない。

驚くべきことに，上の Balz の批判をはじめ，数多くの批判に，ギュトゲマンスはその雑誌やモノグラフ叢書を開放しているのである。**業績表**に見られるように，かれはこれらに反論を行なって，“生成詩学”の基礎固めを試みている。この一事をもってしても，かれの開かれた態度は明らかであり，一部にかれを独断論者と批難する向きがあっても，それが的外れなことは明らかであろう。

論理よりも感性を尊ぶ日本で，しかも，宗教――ギュトゲマンスの場合は神学――という，論理に馴染まぬ分野において，宗教的メッセージを敢て科学的たらしめようという，かれの野心的試みがどれほどの反響を持ちうるかは，想像するまでもない。だが，文学研究を科学化する試み（Yu. Lotman）や，柳田民俗学をプロップ的なそれへ導く試みが焦眉の課題になっているのと同様，伝統的神学もギュトゲマンスの聖書言語学（生成詩学）への転回こそ当面の重要事であるに違いない。良薬は口に苦くても呑まざるを得ないのである。さもなくば，付録の論文の中でギュトゲマンスも言っているように，神学と，言語学（のような飛躍的成果をもたらしている学問）との乖離はますます広がり，

救い難い神学となり果てる危険が現実と化するかも知れないのである。

E・ギュトゲマンス教授の履歴表

1935年3月6日　金属細工師 Georg Güttgemanns とその妻 Anna Güttgemanns（実家の姓は Paulussen）との息子として Rheydt（現：Mönchengladbach 2）に生まれる

1941年—1946年　Rheydt-Geneicken 小学校に学ぶ

1946年—1955年　Rheydt　市立近代語ギムナジウム（現：Hugo-Junkers-Gymnasium——1977年，創立150周年記念——）に通学

1955年2月19日　ラテン語卒業試験

1955年3月23日　（3年間の独学の後）Düsseldorf 教師団による補欠試験審査委員会の前でギリシャ語試験（総評：優）

1955年5月2日　Wuppertal 神学大学神学科（Fr. Lang, H. W. Woltt, E. Mühlhaupt, G. Eichholz）に入学

1955年夏学期—1955／56年冬学期　Wuppertal にて福音神学を研究

1956年夏学期—1957／58年冬学期　Göttingen にて福音神学ならびに心理学，哲学を研究（W. Zimmerli, E. Käsemann, J. Jeremias, E. Wolf, F. Gogarten, K. Galling, R. Rendtorff, W. Trillhaas, O. Weber, J. Klein）

1958年夏学期—1959／60年冬学期　Bonn にて福音神学ならびに心理学，哲学，ラビ語学を研究（O. Plöger, M. Noth, Ch. Horowitz, Ph. Vielhauer, E. Dinkler, E. Bizer, W. Schneemelcher, W. Kreck, H. Karpp, H. J. Iwand, P. Schempp, E. Rothacker, Schweitzer, Fervers）

1955年８月10日　Rhein 福音教会主宰ヘブライ語試験（総評：優）

1960年５月27日　Düsseldorf　地区教会事務局による第一次神学試験（総評：大体に優）

1960年夏学期－1963年夏学期　Wuppertal 神学大学　（Prof. Dr. W. Nauck，一部は Prof. Dr. G. Eichholz）新約聖書学助手兼図書館管理

1962年４月30日　Gisela Bresges と結婚

1963年７月20日　Bonn 大学福音神学部ドクトル口述試験（総評：優等）；　学位論文："Die Leiden des Apostels als Merkmal paulinischer Christologie"（評価：最優等）

1963年11月22日　Düsseldorf 地区教会事務局による第二次神学試験（総評：優）

1963年冬学期－1967／68年冬学期　Bonn 大学福音神学部学術助手：図書館管理の学究指導（"セミナー助手"）

1965年２月25日　長男 Ard 出生

1966年11月19日　Bonn 大学福音神学部神学博士号授与式；博士号授与公開講義："Die Kategorie der "Anschaulichkeit" in der Hermeneutik der Neuen Testaments"

1967年８月17日　長女 Regine 出生

1968年夏学期　Prof. Dr. H.-G. Geyer の下で組織神学学術助手（"新約聖書"部門大学教員資格を獲得できるよう Prof. Vielhauer 氏の友好的勧誘に応じて）

1968年10月19日　"新約聖書"部門大学教員資格獲得手続の開始

1970年４月22日　大学教員資格獲得論文が承認される

1970年７月４日　"新約聖書"　部門大学教員資格の"口頭試問"と同資格の授与

1970年10月22日　大学教員就任公開講義："'Gottesgerechtigkeit' und strukturale Semantik"

1970年11月15日　雑誌 "Linguistica Biblica" 創設
1972年12月15日　モノグラフ叢書 "Forum Theologiae Linguisticae" 創設
1973年３月８日　"大学教授" 辞令発令
1979年12月19日　員外教授辞令

E・ギュトゲマンス教授の業績表

1. 書評：E. Fascher, "Vom Anfang der welt und vom Ursprung des Menschengeschlechts". 1961, in: *Kirche in der Zeit* 18. 1963, 456.
2. 学位請求論文：*Die Leiden des Apostels als Merkmal paulinischer Christologie.* Inauguraldissertation, Evang. Theol. Fak. Bonn 1963, 529S.

2a. モノグラフ：*Der leidende Apostel und sein Herr. Studien zur paulinischen Christologie.* (FRLANT 90). Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen 1966, 419S.

3. 書評：D. Georgi, "Die Gegner des Paulus in 2. Korintherbrief". (W MANT 11). 1964, in：*Zeitschrift für kirchengeschichte* 77. 1966, 126 – 131.
4. 研究報告：Literatur zur Neutestamentlichen Theologie. Randglossen zu ausgewählten Neuerscheinungen. *Verkündigung und Forschung* 12/2. 1967, 38–87.
5. 書評：W. Schmithals, "Die Theologie Rudolf Bultmanns". 1966, in: *Theologia Practica* 3. 1968, 87–100.
6. 書評：J. M. Robinson / J.B. Cobb (編), "Die neue Hermeneutik". (Neuland in der Theologie 2). 1965, in：*Pastoraltheologie* 57. 1968, 353f.
7. 省察：Diakronie–Durcheilen des Staubes im Zeichen des Kreuzes. Me-

ditationen zu einem wesentlichen Aspekt paulinischer Theologie, in: *Die innere Mission* 58. 1968, 355-364.

8. 論文：*Χριστός* in 1 kor 15, 3b — Titel oder Eigenname? Ein Beitrag zu einer linguistischen Kontroverse. *Evangelische Theologie* 28. 1968, 533—554.

9. 書評：D. Lührmann, "Das Offenbarungsverständnis bei Paulus und in paulinischen Gemeinden." (WMANT 16). 1965, in: *Theologische Literaturzeitung* 93. 1968, 510—515.

10. 書評：R. Scroggs, "The Last Adam". 1966, in: *Theologische Literaturzeitung* 93. 1968, 506f.

11. 書評：H. Ridderbos, "De Pastorale Brieven". 1967, in *Theologische Literaturzeitung* 94. 1969, 504—506.

12. 書評：V. C. Pfitzner, "Paul and the Agon Motif". 1967, in: *Theologische Literaturzeitung* 94. 1969, 828f.

13. 書評：G. Thils/R. E. Brown (編), "Exégèse et Théologie." 1968, in: *Theologische Literaturzeitung* 94. 1969, 887—889.

14. 雑文：Artikelloses mašîah? Antwort an Ina Plein. *Evangelische Theologie* 29. 1969, 675f.

15. 研究報告：Sprache des Glaubens—Sprache der Menschen. Probleme einer theologischen Linguistik. *Verkündigung und Forschung* 14/2. 1969, 86—114.

16. モノグラフ：*Offene Fragen zur Formgeschichte des Evangeliums. Methodologische Skizze der Grundlagenproblematik der Form-und Redaktionsgeschichte.* タイプ印刷, Bonn 1968, 288S.

16 a. モノグラフ：*Ibidem.* (BEvTh 54). Chr. Kaiser Verlag München 1970, 280S.

16 b. モノグラフ：*Ibidem.* 2. verb. Aufl. 1971, 280S.

16 c. モノグラフ：*Ibidem.* William G. Doty による英訳：*Candid Questions concerning Gospel Form Criticism. A Methodological Sketch of the Fundamental Problematics of Form and Redaction Criticism.* Pickwick Press 1979.

17. 大学教員資格獲得論文：*Recht und Gnade als göttliche "Hypostasen" in rabbinischer Haggada.* タイプ印刷, Bonn 1969, 147S.

18. 論文："Linguistische Probleme in der Theologie I. Skizze von Plänen und Ergebnissen der Forschung." *Linguistische Berichte* 8. 1970, 18–29.

19. (米語よりの) 独訳：Dan Otto Via, *Die Gleichnisse Jesu. Ihre literarische und existentiale Dimension.* (BEvTh 57). Chr. Kaiser Verlag München 1970, 217S.

19 a. 訳者後記：Der literaturwissenschaftliche Kontext der Gleichnisauslegung von Dan Otto Via Jr., *Ibidem* 202–212.

20. 雑誌："Linguistica Biblica. Interdisziplinäre Zeitschrift für Theologie und Linguistik" の創刊 (1970 年11月15日). 同時に出版社"Linguistica Biblica Bonn" (出版商：Gisela Güttgemanns), Börsenverein deutschen Buchhandels により認可さる。

21. 論文：Thesen zu einer "Generativen Poetik des NT". *Linguistica Biblica* 1. 1970, 2–5.

22. グラフィック：Zeichnerische Darstellung der "Generativen Poetik". *Ibidem.* 6.

23. 解説："Anleitung zur Entzifferung der Zeichnung". *Ibidem.* 7f.

24. 論文：Struktural–generative Analyse der Parabel "Vom bittenden Freund" (Lk 11, 5–8). *Linguistica Biblica* 2. 1970, 2–11.

25. 論文："Einige wesentliche Denkmodelle der Semiotik". *Linguistica Biblica* 3. 1971, 2–18.

26. 論文："Theologie als sprachbezogene Wissenschaft". *Linguistica Biblica* 4/5. 1971, 7–41.

26a. 論文：*Ibidem.*(要約), in: Ulrich Engel/Olaf Schwencke (編), *Gegenwartssprache und Gesellschaft. Beiträge zu aktuellen Fragen der Kommunikation.* Pädagogischer Verlag Schwann Düsseldorf 1972, 137–163.

26b. 論文：*Ibidem.*(修正), Manfred Kaempfert (編), *Probleme der religiösen Sprache.* (Wege der Forschung CCCCXLII). Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt に収録予定。

27. 論文：Struktural–generative Analyse des Bildworts "Die verlorene Drachme" (Lk 15, 8–10). *Linguistica Biblica* 6. 1971, 2–17.

28. 書評："Die Bedeutung des französischen Strukturalismus für die Theologie. Zu einem neuen Buch von Günther Schiwy". *Linguistica Biblica* 7/8. 1971, 27–30.

29. 研究報告："Literatur zur neutestamentlichen Theologie. Überblick über Fortgang und Ziele der Forschung". *Verkündigung und Forschung* 15/2. 1970(1971), 41–75.

30. 論文集：*studia linguistica neotestamentica. Gesammelte Aufsätze zur linguistischen Grundlage einer neutestamentlichen Theologie.*(BEvTh60). Chr. Kaiser Verlag München 1971, VIII+243S.

30a. 論文集：*Ibidem.*, 2. Aufl. 1973.

30b. 論文：No. 8に同じ, *studia* 1–24.

30c. 雑文：No. 14に同じ, *studia* 25–33(補足修正： S. 27–33).

30d. 論文："Heilsgeschichte bei Paulus oder Dynamik des Evangeliums? Zur strukturellen Relevanz von Röm 9–11 für die Theologie des Römerbriefs"; 大学教員資格獲得手続としてBonn 大学福音神学部で1970年7月4日に行なわれた試験講義, *studia* 34–58.

30e. 論文：“Gottesgerechtigkeit” und strukturale Semantik. Linguistische Analyse zu δικαιοσύη θεοῦ. 大学教員資格獲得手続として，1970年10月24日の Bonn 大学公開初講義，*studia* 34—58.

30f. 論文：“Die linguistisch—didaktische Methodik der Gleichnisse Jesu”, *studia* 99—183.

30g. 論文：No. 26 に同じ. *studia* 184—230.

31. 論文：“Text” und “Geschichte” als Grundkategorien der Generativen Poetik. *Linguistica Biblica* 11/12. 1972, 2—12.

32. 論文：Linguistische Analyse von Mk 16, 1—8. *Linguistica Biblica* 11/12. 1972, 13—53.

33. 論文：Linguistisch—literaturwissenschaftliche Grundlegung einer Neutestamentlichen Theologie. *Linguistica Biblica* 13/14, 1972, 2—18.

33a. 論文：*Ibidem.*（討論用に敷衍），in: Thomas Michels/Ansgar Paus（編），*Sprache und Sprachverständnis in religiöser Rede. Zum Verhältnis von Theologie und Linguistik.*（Internationales Forschungszentrum für Grundfragen der Wissenschaften Salzburg, Forschungsgesprache 12). Universitätsverlag Anton Pustet Salzburg/München 1973, 171—202.

33b. 討議への寄稿，in: *Ibidem.* 59f. 71—73. 75. 77f. 79—83. 132. 197—202. 211f. 215f. 222f.

34. 論文：“Das Problem der semantischen Rationalität”. *Linguistica Biblica* 17/18. 1972, 2—20.

35. 論文：“Bemerkugen zur linguistischen Analyse von Mt 13, 24—30. 36—43”，タイプ印刷，Linguistica Biblica Bonn 1972, 18S.

35a. 論文：*Ibidem.*（要約），in：Elisabeth Gülich/Wolfgang Raible（編），*Textsorten. Differenzierungskriterien aus linguistischer Sicht.*（Athenäum—Skripten Linguistik 5). Athenäum Verlag Frankfurt 1972, 81—

97.

35b. No. 35 および他の論考への討議用寄稿：*Ibidem.* 52. 76. 9o—97. Literatur: ibid. 218f.

36. 研究班の作業資料："Material zur Analyse erzählender Texte der Bibel mittels der strukturalen Methodik von Vladimir Jakovlevič Propp". Linguistica Biblica Bonn 1972, 5S.

37. 論文：Qu' est—ce que la Poétique générative? Thèses et réflexions pour la discussion des recherches concertées à Lyon—Fourvière (4—5—juillet 1972), "Langage théologique et sciences du langage". *Linguistica Biblica* 19. 1972, 2—12.

38. 反論："Plädoyer für Sachlichkeit und Anstand. Die Generative Poetik und ihrer Kritiker". *Linguistica Biblica* 19. 1972, 30—35.

39. 編集部論説：Zwei Jahre "Linguistica Biblica". *Linguistica Biblica* 20 1972, 35—40.

40. 論文集：Uwe Gerber/Erhardt Güttgemanns(編), *"Linguistische" Theologie. Biblische Texte, christliche Verkündigung und theologische Sprachtheorie.* (Forum Theologiae Linguisticae 3). Linguistica Biblica Bonn 1972, 248S. (中心はE. Güttgemanns)

40a. 論文集：*Ibidem.* 2. Aufl. 1975.

40b. 挨拶：zu Beginn der Tagung "Linguistische" Theologie in der Evang. Akademie Loccum; ibid. 7—9.

40c. 論文：No. 31 に同じ; ibid. 38—55.

40d. 論文：No. 32 に同じ; ibid. 59—100.

40e. 省察："Strukturale Meditation über Mt 4, 1—11", ibid. 173—175.

40f. 討議への寄稿：S. 35. 37. 139f. 141—144. 170—172.

40g. 文献：当時までに発行ないし計画された仕事; ibid. 210—213, No. 294—336.

41. 未定稿教科書：*Einführung in die Linguistik für Textwissenschaftler* 1. Kommunikations— und informationstheoretische Modelle. タイプ印刷, Linguistica Biblica Bonn 1972, 88S.

41a. 教科書：*Ibidem.* (Forum Theologiae Linguisticae 2). Linguistica Biblica Bonn 1978, VIII+134S.

42. 文献共編：1972年末より，定期的に下記の文献編集に協力：

42a. *Elenchus Bibliographicus Biblicus,* Roma.

42b. 雑誌 "Germanistik".

42c. *IZBG, Internationale Zeitschriftenschau für Bibelwissenschaft und Grenzgebiete,* Tübigen.

42d. *LLBA, Language and Language Behavior Abstracts,* Ann Arbor.

42e. *MLA, Modern Language Association,* New York.

42f. *NTA, New Testament Abstracts,* Cambridge, Mass.

42g. *L'année philologique,* Heidelberg.

42h. *Religious and Theological Abstracts,* Myerstown, Pa.

42i. *Speech Abstracts,* Long Beach, Ca.

42j. *Deutsche Bibliographie,* Frankfurt.

42k. *Deutsche Bibliographie,* Leipzig.

42l. *Centre Protestant d'Études et de Documentation,* Paris.

42m. *Degrés,* Bruxelles.

42n. *Scripta recenter edita,* Nijmegen.

42o. その他，40有余の雑誌にも "Linguistica Biblica" 所収の英語 Abstracts が掲載.

43. 文献共編：Wolfgang U. Dressler/Siegfried J. Schmidt (編), *Textlinguistik. Kommentierte Bibliographie.* Kritische Information 4). Wilhelm Fink Verlag München 1973, II+120S. (略号：Gt).

44. 論文："Einleitende Bemerkungen zur strukturalen Erzählforschung". *Lin-*

guistica Biblica 23/24. 1973, 2—47.

45. 編集部による手引："Theologie und Linguistik in Russland". *Linguistica Biblica* 23/24. 1973, 62.

46. 論文："Narrative Analyse synoptischer Texte". *Linguistica Biblica* 25/26. 50—73.

47. 編集部論説：Die Arbeit geht weiter! Einige Bemerkungen zum Stil der Auseinandersetzung mit der "linguistischen" Theologie in Deutschland. *Linguistica Biblica* 27/28. 1973, 41—44.

48. 論文：Die synoptische Frage in Licht der modernen Sprach-und Literaturwissenschaft 1. *Linguistica Biblica* 29/30. 1973, 2—40.

49. 編集部論説："Linguistica Biblica —in 4. Jahrgang völlig neu!". *Linguistica Biblica* 29/30. 1973, 66.

50. 論文集：Uwe Gerber/Erhardt Güttgemanns（編）, *Glauben und Grammatik. Theologisches "Verstehen" als grammatischer Textprozess.* (Forum Theologiae Linguisticae 4). Linguistica Biblica Bonn 1973, 194S.

50a. 論文集：*Ibidem.* 2. Aufl. 1974.（Uwe Gerber については上記の No.40. 参照）.

50b. 論文："Zur Einführung". ibid. 1—4.

50c. テーゼ："Glauben und Grammatik". ibid. 5—7.

50d. 省察："Strukurale Meditation zu Exodus 3, 1—14"; ibid. 75—79.

50e. 論文："Gibt es eine Grammatik der Rede von Gott?".（No.51）

50f. 論文："Genarative Poetik" —was ist das?（No. 37）

50g. 論文："Glauben —Theologie — Grammatik", ibid. 169— 194.

51. 論文："Y a-t-il une grammaire du Discours sur Dieu?". *Recherches de Sciences Religieuses* 61. 1973, 105—118（No. 50e. の仏語縮約版）.

52. 論文：Erzählstrukturen in der Fabel von Wolfgang Amadeus Mozarts

"Zauberflöte". Ein Beitrag zur Heiterkeit der Kunst und zum historischen Jesus. *Linguistica Biblica* 31. 1974, 1—42.

53. (仏語からの)独訳：Pham hũ'u Lai, "Sinn—Erzeugung durch den Glauben—widerlegte. /. begründete religiöse Autoritäten: Strukturale Analyse von Matth 27, 57—28, 20. *Linguistica Biblica* 32. 1974, 1—37.

54. 論文："Die Funktion der Zeit in der Erzählung". *Linguistica Biblica* 32. 1974, 56—76.

55. 論文："Wissenschaftstheoretische Probleme der struktural-generativen Methode in den Textwissenschaften 1. Grundlagen und Grundfragen". *Linguistica Biblica* 33. 1974, 89—116.

56. 論文：No. 50f. に同じ; Helmut Fischer(編), *Sprachwissen für Theologen*. Furche—Verlag Hamburg 1974, 97—113 に収録.

57. 論文："Semeia" — ein Zeichen der Zeit! *Linguistica Biblica* 35. 1975, 84—106.

58. 論文："Die Bedeutung der Linguistik für die Religionspädagogik". *Der evang.* Erzieher 27. 1975, 319—333.

59. 論争テーゼ：(Dies academicus 23. 6. 1976 に寄せて): Philosophische und theologische Gottesfrage (対論者: Prof. Dr. Hans Jorissen). タイプ印刷, Bonn 1976, 2S.

60. 反論：*Liguistica Biblica* 37. 1976, 30.

61. (仏語より) Siegfried Virgils と共訳：Louis Marin, *Semiotik der Passionsgeschichte. Die Zeichensprache der Ortsangaben und Personennamen.* (BEvTh 70). Chr. Kaiser Verlag München 1976, 202S.

61a. 訳者後記："Lektüre—Hilfen für den Leser"; *ibid.* 188—196.

62. 論文："Strukturen des Mythos in Comic—Form"; in: Jutta Wermke(編), *Comics und Religion.* (Kritische Information 46). Wilhelm Fink Verlag München 1976, 33—50.

63. 論文：Die Relevanz des Korpus—Begriffes für die Theologie. *Linguistica Biblica* 38. 1976, 75—80.

64. 論文集（英訳）: Norman R. Petersen(編), Erhardt Güttgemanns' "Generative Poetics" (translated by William G. Doty). *Semeia* 6. Society of Biblical Literature, Scholars Press, Missoula, MT 1976, XVI+220S. (No. 50f. 44. 33. の英訳および詳細な文献資料).

65. 論文：Fundamentals of a Grammar of Oral Literature.(Reprint 1973); in: Heda Jason/Dimitri Segal (編), *Patterns in Oral Literature.* (World Anthropology). Mouton, The Hague 1977, 77—97.

66. 論文：Narrative Analyse des Streitgesprächs über den "Zinsgroschen". *Linguistica Biblica* 41/42. 1977, 88—105.

67. 辞典：Heda Jason, in collaboration with Gr. Grober—Glück, E. Güttgemanns and D. Segal, *Ethnopoetics. A Multilingual Terminology.* (Israel Ethnographic Society, Studies 3). Jerusalem 1975(正しくは1978), VI+89S.

68. 論文：sensus historisticus und sensus plenior oder über "historische" und "linguistische" Methode. Thesen und Reflexionen zur erkenntnistheoretischen Funktion von Linguistik und Semiotik in der Theolologie. *Linguistica Biblica* 43. 1978, 75—112.

69. 論文：Über Möglichkeit und Notwendigkeit der Verwendung von Comics als Medium christlicher Verkündigung";in: Jutta Wermke(編), *Kerygma in Comic Form.* (Kritische Information 81). Wilhelm Fink Verlag München 1979, 68—92.

70. モノグラフ：*Candid Questions Concerning Gospel Form Criticism. A Methodological Sketch of the Fundamental Problematics of Form and Redaction Criticism,* transl. by William G. Doty. (Pittsburgh Theological Monograph Series 26). Pickwick Press, Pittsburgh, 1979,

XX+418S.

71. 論文：“Die Funktion der Erzählung im Judentum als Frage an das christoliche Verständnis der Evangelien”. *Linguistica Biblica* 46. 1979, 5—61.

72. 論文（近刊）：No.46の改訂版; in: Wolfgang Harnisch(編), *Die neutestamentliche Gleichnisforschung im Horizont von Hermeneutik und Literaturwissenschaft.* (Wege der Forschung 575). Wiss. Buchgesellschaft, Darmstadt; 1980/81用に計画

73. 追悼論文：“Hommage à Roland Barthes.” *Linguistica Biblica* 47. 1980, 61—72.

74. 論文：“Theologie und Kirche-semiotisch betrachtet”. *Linguistica Biblica* 47. 1980, 73—91.

75. 論文：“Ferdinand de Saussure: Der redende Mensch als unbewusster Schachspieler”. *Linguistica Biblica* 47. 1980, 93—130.

76. 基調報告：“Pragmatik and Psychosemiotik in der Theologie. Thesen zu Geschichte und Funktion der Semiotik in der Theologie”. Kolloquium von 18. bis 21. sept. 1980 in Bonn. Deutsche Gesellschaft für Semiotik e. V., 16S.

77. 論文：“Elementare semiotische Texttheorie”. *Linguistica Biblica* 49. 1981, 85ff.

78. モノグラフ（近刊）：*fragmenta semiotico-hermeneutica. Eine Texthermeneutik für den Umgang mit der Heiligen Schrift.* Linguistica Biblica Bonn, 1981, ca. 300S.